2023 年 3 月 22 日（2023 年 3 月 23 日修正版）

日本国内で薬剤耐性白癬（皮膚糸状菌症）が広がっていることを明らかに

【本研究の概要】

白癬（皮膚糸状菌症）は、水虫・たむしとも呼ばれるとてもありふれた感染症で、近年、抗真菌剤に耐性をもつ白癬菌が日本も含めて世界的に報告されています。帝京大学医真菌研究センター教授 加納塁と東京医科大学皮膚科学分野および皮膚科クリニックらの共同研究グループは、抗真菌剤耐性を示す白癬菌の感染状況について国内初の調査を実施しました。結果、抗真菌剤耐性白癬は確実に存在し、また耐性をもつ菌種が増えていることを明らかにしました。引き続き、医真菌研究センターは、抗真菌剤耐性菌の感染状況に関する調査を実施し、医療への貢献と研究成果の社会実装の推進へと努めてまいります。

【本研究の背景】

白癬（皮膚糸状菌症）は、水虫・たむしとも呼ばれ、日本人の 4～5 人に 1 人が感染していると予想されるとてもありふれた感染症です。白癬は皮膚の炎症や、においなどの不快感のほかに、家族への感染が生じやすいとても厄介な病気です。また皮膚の防御機能を損なうため、老人で重度の糖尿病などを併発していると、重い感染症を引き起こしてしまい、足を切断するなど怖い病気につながる原因となります。白癬の治療は、抗真菌剤の塗り薬または飲み薬で行われますが、近年、抗真菌剤に耐性をもつ白癬菌が日本も含めて世界的に報告されるようになりました。しかし、国内の白癬患者のうちどれくらいの割合で抗真菌剤耐性菌に感染しているかについては明らかになっていませんでした。そこで、帝京大学医真菌研究センター教授 加納塁と東京医科大学皮膚科学分野および皮膚科クリニックの共同研究グループは、国内の白癬患者における抗真菌剤耐性を示す白癬菌の感染状況についての調査を 2020 年および 2022 年に実施しました。

【本研究の概要と意義】

調査は、白癬患者から耐性菌を分離培養することで行いました。2022 年の調査では、国内白癬患者の約 2.3%が治療薬のテルビナフィン耐性株に感染し、2022 年には約 1.4%の患者が、新たに耐性株に感染していました。2 年間で耐性率に増加はありませんでしたが、確実に分離されることが分かりました。

調査を進める中で、テルビナフィン耐性株のすべてに対し、別系統の抗真菌剤が有効であることが分かりました。また 2022 年の調査により、抗真菌剤耐性を示す白癬菌の菌種が増えていることが明らかになりました。耐性株感染者の中には、他の感染者から感染したことが考えられるケースもありました。

これらの調査結果をもとに、白癬の治療における薬剤耐性白癬菌への対応が必要であることが分かりました。治療に使用する抗真菌剤が効かない場合は、他の薬剤が効くかどうか検査を行い、適切な治療薬に切り替えることで、なかなか治りにくい白癬患者さんへの負担を軽減することができると期待されます。

【発表雑誌】

本研究成果は、2023 年 3 月 20 日（月）に国際学術雑誌「Journal of Dermatology」へ掲載されました。

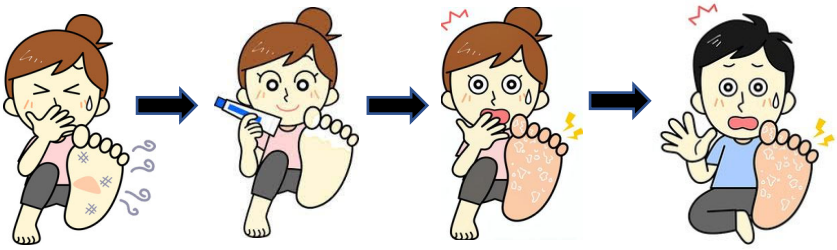
タイトル：Epidemiological study of antifungal-resistant dermatophytes isolated from Japanese patients

著者名：Junichiro Hiruma, Hiromitsu Noguchi, Tatsuya Shimizu, Masataro Hiruma, Kazutoshi Harada and Rui Kano.

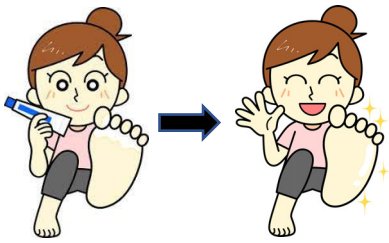
掲載誌：Journal of Dermatology

DOI: 10.1111/1346-8138.16780

【助成金】
本研究の一部は、本研究は JSPS 科研費(22K08442)の助成を受けたものです。



耐性示す薬で治療しても治らず、
他の方へうつしてしまいます



耐性菌感染の場合は、効く薬を
選んで治療しましょう

【お問い合わせ先】
帝京大学 本部広報課
〒173-8605 東京都板橋区加賀 2-11-1
TEL：03-3964-4162 9 E-mail：kouhou@teikyo-u.ac.jp